

木喰行道上人の彫刻とその生涯

知見寺 園江

(第二回生)

序

下降の一途をたどっている江戸期の彫刻仏の中で、円空仏と木喰仏だけが、光を放っている事に疑問を感じていた私は、ある日、古書店の一隅から、怠惰な私に向って、微笑みかけている一冊の本を見つけた。淡光社刊、「微笑仏」。微笑、かすかな笑い。私は、その微笑に非常な興味を持った。なぜ笑っているのだろうか、なぜ微笑仏ばかりこつこつと彫り続けたのだろうか。そして、木喰行道とは、どんな人だろう。

ある現代画家は、外国の彫刻には、いわゆる人間的な味があり、日本の仏像彫刻には、それが無い。非人間的であり、冷酷であると批判なさったそうだ。しかし、木喰彫刻は、どう見ても泥くさく、野暮ったい。ぶくぶくと着ぶくれした、鈍重な農家の主婦の味があり、人間的である。そこには、法隆寺の夢殿観音のような、神秘的な笑いではなく、まことに明かるい笑い、女臭紛々たる笑いがある。それは、時に、カラカラと音をたてて笑っている。

作者、木喰行道は、甲斐国(現在、山梨県西八代郡下部町古閑丸畑)に、享保三年(一七一八)、農家の次男として生まれ、十四才の

時に、故郷を去り、江戸へ出た。そして、二十二歳で、出家の道を選び、その後、四十五歳頃まで、関東地方を転々とし、当時、常陸国羅漢寺住職の、木喰観海について、木喰戒を受け、自署を「三界無庵無仏、木喰行者行道」とした。木喰とは、五穀、十穀を食はず、山中にかくれて人間に接せず、木の実、草の根をとって、命をつなぐ事である。その後、宮崎県日向国分寺の再建を果たした時、行道の名をすてて、木喰戒の上に、五行戒(一)、布施行(二)、持戒行(三)、忍辱行(四)、精神行(五)、止観行(六)というきびしい戒を加えて、「天一自在法門、木喰五行菩薩」とあらためた。そして晩年には、丹波の清源寺に十六羅漢堂を建立して、自署を「神通光明、木喰満満仙人」とあらためている。

このように、彼の名をあらためたゆえんは木喰行道自身の精神的背景が、大きく広く存在している。そして、そのプロセスでは、微笑んではいるが、彫像の面相を少しずつ変化させている。これがつまり、伝統への執着もなければ、伝統への反抗も無かったであろう木喰行道の人間性の現われである。そして、寛政期以後に、いわゆる木喰様式として確立していったのであろう。

一人の芸術家、宗教家は、生長発展の時間的過程を無視して、その芸術、宗教を理解できない。不完全な時代は、客観的に理解するために必要なのだ。

木喰の彫像は、はげしい土の匂いのする無気味さと、ユーモアを持っている。それは、アーリアの秀麗さではなく、我々に似た仏像、モンゴリアンの仏像である。無限の慈悲を物語るような、土着の日本の顔である。

北海道江差市泊にある仏像は、練場の若者達の間を、ひきずり廻

され、しばしば居酒屋にまで連れていかれたという伝説があるが、他所の仏像も、同様であったと思われる。木喰仏は、個人のための仏像ではなかった。すべての村人のものであった。礼拝するというより、親しむものであった。木喰仏は、村人と席を同じくして語り合っていたのだ。そして、時には、消耗してしまった像もあるだろう。古書店でみつけられた彼の本も、人手から人手に渡って本望である。

私は、本論において、すべて、木喰行道と呼ぶが、歴史的客観的な見方をするために、偶像化されやすい「上人」をさけて、「行道」と親しみを込めて呼ぶ。

甲州西八代郡にある丸畑村は、幕末の彫刻僧木喰行道の生地である。私は、その地で初めて木喰仏を実見した。身延線の無人駅、市之瀬より歩いて二時間のところ。村の中心地に、小仏寺永寿庵が南面して建てられている。私は、そこに木喰行道の遠裔である伊藤平庵氏によって案内された。この地は訪ずれ人が稀なのか、その親切ぶりに驚いた。庵は、とりわけ飾りもなく、住む僧もなく、引戸を引いて中に入ると、床板の上にビニールが敷かれていて、壁には、村祭りの心得を書いた紙が貼られてあった。もはや、この庵には、仏寺としての機能が無く、単なる村人の集会所として用いられているように思われた。その集会所の中央の奥の壇に、五つの龕が並び、五智如来像が置かれてあった。

五智如来像は、右より、阿闍如来像、阿弥陀如来像、釈迦如来像、大日如来像、宝生如来像、の順で並べられていると伊藤氏は説

明して下さった。いずれも、百余年の香に煙って黒く、又、塵にすら被われ耐え忍んでいるかのようであった。暗い光の中で、それらはいずれも同じように見え、印相の判別を心得てない私には、どれが宝生如来なのか大日如来なのか、全くわからなかった。しかし、後日になって考えるに、五智如来の名称が、金剛頂経から出たものとすれば、これらの像の並べ方は、でたらめであると言わねばならない。金剛頂経は、智の世界を説くのであるから、その中心の如来は、当然智拳印を持つ大日如来でなくてはならない。発心を示す阿闍如来を東に、修業を示す宝生如来を南に、究竟の相を示す大日如来を中央に、菩薩を示す阿弥陀如来を西に、涅槃を示す釈迦如来を北に並べることが正しい並べ方だと思ふ。したがって、永寿庵の仏像の並べ方は、後世の無知な村人が、釈迦如来が一番尊いといった浅い考えで、並び変えたものだと思われる。

中央の大寺に置かれていない木喰仏の悲哀が、こんな所にも表われているのだと思われた。

如来の顔は、いずれも肥えていて、目、口、耳、鼻が、とてつもなく大きい。そして、その大きな口もとは、何やら不思議な笑いが浮んでいる。私は、その微笑をみていると、いつとはなしに、広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像を思い出していた。アルカイックな笑い、古来から多くの人々が、その微笑について、筆をついやしてきた。そして、その微笑を、どのように讚美するかによって、仏像に対する鑑賞度を示そうとしてきた。弥勒菩薩半跏思惟像、それを見る時、私達は、木陰に憩う処女の微笑を思い起すであろう。そして、その処女は、私達の目には、はるか西方から渡ってきた異国の処女として写るであろう。その背後には、ガンダーラーの石仏が見

られ、遠くエーゲ海の香すら漂ってくるかも知れない。

木喰仏には、それらのものは皆無である。優雅さ、崇高さ、直観的に、私達が美しいと感じ、犯し難さを感じるものは、何も無い。

あるのは、健康そうな農家の主婦の顔であり、ふてぶてしさを感ずる程の、不可思議な、時には、ドキッとさせる程高らかな微笑である。

弥勒菩薩半跏思惟像の微笑は、ある程度、私にも理解できるように思われる。古代ギリシャ人が、古代エジプト人から像を作る事や学んだ時、彼等は、あの永遠の空間をにらみつつ、沈黙の瞑想を続けているような像の口もとに、微笑を加えた。そして、その微笑は、王政の下のエジプト人民の微笑ではなく、古代民主主義の下の、ギリシャ市民の微笑、それも、エーゲ海の潮風に吹かれて遊ぶ若い男女の微笑であった。そこには生の、この人生の何よりも素直な肯定があり、生存の歡喜の表現があつたのである。アレクサンダーの遠征は、その微笑をインダス川まで運び、仏教の伝来は、それを日本にまで運んだ。

しかし、木喰仏の微笑は、どうも理解できそうもない。どう見ても、それは素直な笑いではなく、生の歡喜の表現どころか、人生の苦惱を知りつくした、ドロドロとした暗い人間の心が微笑の背後にあるように思われてならない。

童樹の「大智度論」の言葉を借りると、「笑うに種々の因縁あり。ある人は歡喜して笑い、ある人は瞋恚して笑い、ある人は人を輕んじて笑い、あるいは異事を見て笑い、あるいは羞恥すべきことを見て笑い、あるいは殊方の異俗を見て笑い、あるいは希有の難事を見て笑う。今は是れ第一希有の難事なり、衆生の為に説いて解脱を得しめんと欲す。是れ第一の難事なり……是れ難事を以ての故に

笑う。」(註、NHKブック「仏像」―仏像の誕生)とある。

仏は、苦難に会うと、苦難、何するものぞと笑うのである。それは、敵に勝つ事よりも自己の欲望に勝ち、無限の苦難に対する克服の意志を込めた、衆生救済の祈りをこめた笑いなのだ。慈悲行の笑いなのだ。木喰行道は自分で体得したのであるうか、仏の笑いの意味を知っていた。そして、その笑いを、自己が彫る仏像のすべてに刻んでいった。千体仏を作成する事を希望して止まない、自分の自刻像には、無論、苦難に対する高らかな微笑を刻んでいった。その苦難を知るが故に、なおの事。私は、木喰仏の笑いをこのように考へる。

五智如来を見た後、私は、伊藤氏に案内されて、二軒の農家を廻った。またここでも、茶菓を出され歡待された事を感謝する。「相憎の天気じやな、東京から論文書くだとお客さんじや、木喰さんみせておくんな。」

そこには、かつて四国堂建立の際の、八十八体仏の遺品として、馬頭観音像と薬師如来像が小林一郎氏宅に、そして、千手観音像と聖観音像が岩松正治氏宅に保存されていた。仏像の高さは、どれも七二―七三センチメートルであり、下には、荷葉、次に蓮台がある。その上に仏は光背を戴いて端座している。用いられた木は、厚朴の木であると説明された。五智如来よりも、はるかに良く保存されていて、艶光りしていた。そして、各々は仏壇にまつられて、家の信仰の対象となっていた。

この事は、木喰仏にとって、奈良や飛鳥における仏としてより、はるかに幸福な事ではないだろうか。ここでは、信仰は生きており、かく祭られることこそ、作者木喰行道の願ひであったかも知れ

ない。

さて、私はここである事に気づいた。それは、聖観音像の形態についてである。木喰研究の第一人者であられるところの、柳宗悦氏は、常に、木喰の彫刻は誰の作風にもとらわれない、独自な作風だと語っていらっしゃる。ところが私は、木喰聖観音像を見たときに、醍醐三宝院の本尊に安置されている、弥勒菩薩像を思い出していた。これは、鎌倉期の巨匠、安阿弥快慶の手によったものであり、木喰の聖観音像、快慶作の弥勒菩薩像、これらの仏像は、天平期以後の菩薩形の特徴として、当然半跏思惟の形態をとっていないが、儀軌に規定されたところの、左手に宝塔をのせた蓮華を持ち、右手は、与願印を示すという形態をもとっていない。共に異例の形態の仏像である。しかるに、これらの仏像の形態は、酷似している。衣のひだといい、首の肉付きといい、その目といい、どうしても木喰行道が、醍醐三宝院を訪ずれて、快慶の弥勒菩薩像を確と心にとめるか、筆写したと思えるのである。

木喰行道は、北海道の江差において、円空仏から大いに影響を得たと言われているが、彼は、快慶や連慶の手による鎌倉期の仏像をもまた、かなり良く研究し、その作風を、彼の彫刻に取り入れたのではないだろうか。これは、彫刻に対して素人の私の単なる仮説にすぎない。しかし、快慶の弥勒菩薩と、木喰行道の聖観音像とが、形態的に酷似している事は事実である。

丸畑に於ける木喰仏を見終つて、私は、山道を下りながら考えていた。木喰は、いつたいこれでも芸術なのだろうか。研究するに値するものだろうか。

私は、木喰仏を見て、美しいとか、荘厳だとか決して思えない。

その荒っぽく彫られた彫像は、私の今までの仏像に対するイメージを大きく狂わせた。彫像の顔は、美しいどころではなく、特に、山神社で見た「山神像」の顔には、醜悪すら感じた。しかし、どうして仏像が荘厳で、かつ美しくなければならないのだろうか。威厳に満ちて、大寺の仏殿に端座していなければならないのだろうか。私はいくつも考えた。確かに、木喰仏のある微笑を見ると、ある種の不気味さと共に、限らない意志の力を感じる。何者にも絶対に負けないう強さを感じる。少し大げさに言うならば、近代期に入った民衆の中に秘められた力を感じる。

いったい、芸術とは、非芸術とは何だろうか、如何なる尺度で区別されるのだろうか。その尺度は美であるか。いや、美であるはずがない、美は絶対的なものではないのだから。相対的なものなのだから。美とは、見る人の感情によって、大きく左右されるものなのだ。そんなものによって、芸術と非芸術を区別されては大変。ある人は、芸術とは、人々の精神を高めるものと言った。ある人は言った。芸術とは、優に別乾坤を建立し得たものだ。そうかも知れない。しかし、木喰仏にとって、芸術、非芸術は関係なく、その論議も全く無用ではないだろうか。

山道にリンドウが咲いている。リンドウはただリンドウのように咲けば良いのであって、その事が、初秋の山にどのような影響があるかと、リンドウには関係ないのだ。木喰仏もその通りだと思ふ。

木喰行道は、ただ、仏像を彫りたいから彫ったのであって、彼の彫刻仏が、芸術であろうと無かろうと彼の知った事ではないのだ。リンドウが、ただ子孫を残すために花を咲かすのと同じように、木喰行道は、ただ貧しい農村の人々の信仰の対象になればと思つて、像

を彫つたにすぎない。それで良いと私は思う。
夕暮の山道のひぐらしは心細い。

二

私は、ここで木喰行道の歩いた足跡を追って、その作品を一つ一つ点検し、それについての記録を述べようとは思わない。何故ならその事に関しては、柳宗悦先生が、余りにも詳しく研究なさっているから。又、彫刻の知識の少ない私が行っても、何の成果もないと思う。私が、これからしてみたいのは、木喰行道の生涯の迷いにつつまれた部分を少し検討して、柳宗悦先生以降の、尊敬され過ぎてゐる木喰観に対して、少し批評を加えることである。

木喰行道に関する記録は、余りにも少なく簡単な自叙伝らしき記録として、「四国堂心願鏡」がある他、廻国の間に泊った宿を記録した宿帳二種、参詣した寺社の納経帳四種、及び、歌集四種があるだけである。

無論、これらの資料は、当時の遊行僧の資料としては、比較的に多い方であろう。しかし、これらの資料は、すべて、彼自身が書いた記録であつて、他人による木喰行道の記録は、京都の清源寺に残る古記録を別として、皆無なのである。つまり、木喰行道に関する客観的資料は、ほとんど存在しないのである。宿帳はともあれ、自叙伝の「四国堂心願鏡」を、記録として、そのまま信ずる事は、非常に危険である。何故なら、「四国堂心願鏡」の最後の歌、(木喰のかたみのふでの おもかげを 心にかけてよ この世のちの世)とあるように、この自叙伝は、他人の目に入る事ばかりではなく、後世の人の目まで意識して書かれたものである。公開を目的とし

た、自叙伝の作者であつて、誰が、脚色したり、隠したりしないだろうか。特に、木喰行道は、人の尊敬を勝ち得、寄進を受けなければ、生活して行けない一遊行僧の身である。自己を修業者として、名高くしようと意図していたのである。当然、その自叙伝を疑つてみるべきではないだろうか。柳宗悦先生をはじめ、多くの木喰研究者は、客観的資料が皆無とは言え、何故か、余りにも盲目的であつたような気がする。

享保三年戊、木喰行道は、さきに述べた丸畑村に於いて、伊藤六兵衛の次男として生まれたとされている。私が丸畑村を訪ずれた時に、伊藤平蔵氏は、姓が伊藤と記録されているからには、すくなくとも、苗字帯刀を許された、庄屋程度の家柄であると、誇つていらつしやつたが、私は疑問に思う。土農工商の士以外の階層の姓は、明治になつてから、すべてつけられたと、伊藤氏は思つていらつしやるようだが、太閤の刀狩りによつて、強制的に、土農工商に分けられたのであつて、公式の文書には記されていないが、農民の多くはそれぞれの姓を持っていた事が明らかになっている。それに、伊藤氏の家は、大変失礼な言い方をさせて戴くが、庄屋の構えとは思われなかつた。

木喰行道はやはり、山里の貧しい農家の次男として生まれたと見るべきだと思ふ。

「四国堂心願鏡」には、木喰行道は、十四歳にして江戸へ出たと書かれている。この事に関して、柳宗悦先生は、野良に仕事に行くと言つて家を出て、そのまま江戸へ行ってしまつたと記し(柳宗悦全集第九巻)、また、大谷大学の五来重先生も、家出同然にして、江戸へ出たのであろう(微笑仏一甲斐の山里)と、書いていらつしや

る。しかし、ここで注意すべきことは、幕権がまだ強固であった享保期において、無断で故郷を離れると、人別帳から除かれてしまうということであり、それは、とりもなおさず、無宿人になってしまふという事である。「四国堂心願鏡」に、「無量の奉公を励み、度度出世する事、度々あると雖も」と、記されている。無量の奉公。木喰の故郷甲州は、有名な甲州商人の産地であるので、木喰行道は、つてを頼って、商家に働きに行ったのではないだろうか。私は、ここで、奉公という言葉が気になる。江戸期においては、「奉公」とは、武家に仕えるという意味であつて、現在とは、大部ニュアンスが異なるのではないだろうか。

甲斐国西八代郡古閑丸畑は、天領である。代官所は、市川の大門町にあつた。木喰行道は、ここにつめる代官の、小者となつたのではないだろうか。二十二歳の時に、堤の工事の検分役として、代官所から出張して来て、故郷に錦を飾つたという伝説があるが、これは、そう不自然な伝説ではないと思う。特に彼自身の書いたものを見ても、高い教養があつたとは言えないが、ある程度の学問があつたように思われる。この学問は、何時、何処で学んだのであろうか。やはり、少年期から青年期の前半にかけて、武家奉公をして、学んだとみるのが妥当ではないだろうか。とにかく、武家奉公にしても、商家に働いたにしても、無宿人では、絶対に出来ないことであつた。この点において、柳宗悦先生も、五来重先生も、余りに後世の木喰行道を意識し過ぎたようである。奇人は、その前半生においても奇人であるとは限らない。

奉公は、彼にとって、気のそくわなない事であつたのだろう。恐らく、彼は、かなり有能な人間であつただろうと思う。しかし、それ

は又、同僚からの妬みも買ひやすかつた。上役に胡麻播る事も苦手であつただろう。いやそれよりも、彼の心には、他人と相入れぬ、何物かがあつたかも知れない。出世の事で、ビクビクする同僚、上役への軽蔑であつたかも知れない。とにかく、木喰行道自身、上役から、「あいつは、仕事は良く出来るが、なんとなく可愛げの無い奴だ」と、評せられただろう。

何処へ行つても、目のかけられるのは、初めの間だけで、彼は次第に疎外されるようになった。彼は失望した。失望すると共に、自分の性格を確と見つめるようになった。そして、自分の心の中に、他人と相入れぬ何かが存することに気づいた。彼は悩み、そして、もう一度立ち上がろうとした。相州大山不動尊へ参籠しようと思ひ立つたのは、その折、二十二歳の時であつた。数日間の精進の後、彼は、山下の子易町で一夜を過ごした。そこで彼は、偶然に、真言宗の僧にめぐり会つた。その僧は、彼の迷いに、一つの光を与えたようであつた。しかし、その光明は、決して光り輝く光明ではなかつた。一歩間違えば、地獄へも導きかねない光明であつた。その僧について、彼は、真言の祈禱術を習つたのであろうか。彼はその後、その祈禱術で、生活の糧を得たようである。「四国堂心願鏡」に寺々の住職をしたとあるが、正式の戒を受けず、僧籍にない彼が、名のある寺の住職をつとめられるはずがなく、無任の寺や庵の堂守をしていたのであろうと思う。

この生活は、かなり自堕落な生活であり、妻帯をもしていたようである。無頼の徒と交わり、女犯をも敢てした彼の前に、二十数年の歲月が虚しく過ぎていった。その間、彼は幸福であつただろう。いや、幸福であるはずがなく、彼は、悪逆を重ねることに、苦

悩みの底へ沈んでいったに違いない。しかし、私達は、この悶々とした、煩惱にうちひしがれている精神こそ見逃してはならないと思ふ。この自堕落な期間があったからこそ、あのふてぶてしい、力強い彫刻が出来たのだ。人の煩惱を、ことごとく知りつくしたようなあの仏像を作り得たのだ。観音像に、あの女性の、肉感的な部分を余す所なく彫り得たのである。悪人こそ、真に成仏できる、といった親鸞の言葉が、ここでは妙に生々しく、私の胸に浮かんでくる。

四十五歳の時、彼は、木喰観海と呼ばれる聖から、木喰戒を受け、はじめて「木喰行者行道」と呼ばれる。木喰戒を受けた人々は、弥勒信者であったと言われる。五穀を断つて木喰行者は、その身をミイラにして、来世に生きようとしたのだ。この人々の遺体は、今もなお、出羽三山に多く残るが、その人々の多くは、人足、百姓などの下層階級の出身であり、現世において、罪を犯した人々なのである。木喰行道も又、来世に、弥勒の世界に希望をつないで、煩惱の現世をすてた。そして、名利はもとより、この世の快楽のすべてを捨てようとしたのだ。この時、実は、彼のもう一つの新しい人生が始まっていたのだ。新しい人生と共に、終りのない旅も又、始まっていた。彼の和歌を一つあげよう。

木喰もいづくのはての 行きだおれ
いぬかからすの えじきなりけり

一生を俳諧に、旅にささげた芭蕉も又、吟じている。
のざらしを 心に風の しむ身哉
なんと、相通じた二人の精神ではないか。

三

日本海の荒波が打ち寄せる海岸線に沿って続く、一筋の道。自然の荒々しさの中に、ちぢこまるようにして点在する漁村。イカ釣り船に群がるウミネコ。道南西海岸を私が訪ずれたのは、北国の秋も終ろうとする頃であった。柳宗悦氏すら訪ずれなかつた、木喰行道の日本廻国の出発点であり、最も初期の木喰仏の残る所である。そこは、余りにも辺鄙でそして、遠かつた。

私は、函館から、中山峠を越えて江差に出た。山々の紅葉は素晴らしかつたが、非常な難路で、江差の役場に着いた時は、陽も暮れかかっていた。役場の観光課の人に、木喰仏の在る所を尋ねると、非常にとまどいながらも、すぐ近くの金剛寺という所に一体残っているはずだと教えてくださった。

海を望める小高い丘の上に、金剛寺はあった。寺の奥さんに「木喰仏を見せていただきたい。」と願うと「本堂にありますから、自由に見てください。」と言われた。奈良や、京都の大寺で、国宝の彫刻仏を前に、とうとうと喋りまくる僧を見なれている私は、金剛寺も又、像に関する由来、伝説などを語るのかと思つて、期待していたのに、少しかたが違つたようだ。「木喰仏について、何か教えてくださいいただけますか。」と頼むと、奥さんは、切干大根を作る手を休めずに、「何も伝わっていないのですよ。」と、わかりにくい方言で答えるだけであった。木喰行道は、彫刻は残したが、伝説は残していなかったようである。彼の事跡は、人々の胸裏から、遠く忘却の彼方へ去っていた。

その像は、子安地藏といい、高さは、二メートル程もあるろうと思われた。顔は、微笑んでいるようではあつたが、後期の作のようなふてぶてしさは無かつた。むしろ、その顔には、何となく固さがあ

った。顔の造作は、やはり大きくて、釣り合いがとれていないのであるが、その表情の奥には、清冽さといった感じがひそんでいた。それは、固さがとれない前期の作の故であろうか、それとも、北辺の地での作の故であろうか。とにかく、この像には、あの丸畑での像とはひどく異なる印象を受けた。

その後、少し北の泊という所の観音寺にも、木喰仏があると教えられて、私は、夕開が迫る頃、観音寺に向った。こども又、小高い丘の上に建ち、寺の人の応待も、前の寺と同じように簡単であった。今度はさっさと本堂へ通って、私は、勝手に厨子を開いて、像を拝見した。この像も又、地蔵菩薩であった。高さは、二メートルよりかなり低く思われた。像の表情は、金剛寺の地蔵菩薩と同じようである。私は、何やら同じ像を見ているような気がしてならなかった。寺の人は、何も話さず、たださながらだったが、その後、宿とした所で「檜山の史跡と伝説」という本を見ると、この地蔵菩薩について述べられてあった。

木喰行道は、この観音寺のある泊地区に、二年間、留錫したそうである。しかし、この地蔵菩薩像は、元からここにあったものではなく、函館市地蔵町の堂にあったのだが、この二メートル近い立像をかついで、漁師達が博奕場へ行くと、不思議に勝運がついたと言われ、江差付近まで、散々にひきずり廻された挙句、この観音寺に、安住の地を求めたそうである。博奕場へ引いて行かれたとは、いかにも木喰仏らしくて、微笑ましい事ではないか。とにかく、木喰有縁の地におさまったのだから、地蔵様もほっとした事であろう。翌日、私は、海岸線に沿って北上し、熊石に向った。この辺は、木喰行道が、その行脚で達した最北の地であり、又、安永年間に、

松前藩が置いた、最北の勤番所があった所である。つまり、この地は、江戸時代においては、倭人の住む最北の地であり、それより北は、言うなれば、日本国ではなかったのである。日本全国を廻国しようと思いついて、この地まで達した彼の執念には、驚くべきものがある。海岸線は、いたるところで、絶壁となって海に落ち、海上はるかに、奥尻島が望まれる。

この熊石町の法蔵寺という所にも、木喰仏があった。又もやこの像も、地蔵菩薩像で、「奉安延命地蔵」と呼ばれ、高さが二メートル余りであった。仏像の裏面に、安永九年四月十二日とあり、サンスクリットで、本願経の一部が記され、「作日本廻国行道、花押、慈眼視衆生福聚海無量亦施主藤三郎木台帛」と、蓮華経普門品の一節が、記されてあった。この像の表情も又、前の像の表情と、同じようであった。そこには、私が、甲州丸畑で見た不可解な笑いがあった。微笑させようと像を彫ったのであろうが、像は笑わなかった。その表情は、何だか寂しそうであった。

私が、その道南西海岸で見た、三体の木喰仏は、すべて地蔵菩薩像であった。しかも、これらは、二メートルに近い、あるいは、二メートルに及ぶ大作ばかりであった。何故、木喰行道は、このように、地蔵菩薩ばかりを彫ったのであろうか。無論、地蔵菩薩像は、私達が、最も良く見かける一番庶民的な、いわゆる末法の世を救うために、出現した、なじみ深い仏像である。木喰行道が、地蔵菩薩像を彫っても、何の不思議も無いのだが、しかし、それだからとて、地蔵菩薩の大作ばかり、わずかに二年の間に三体も彫るといふのは、何か深い理由があるのしか思えない。

私はここで、空也上人の「西院河原和讃」を少し引用して、地蔵

仏の心をとらえ、この理由を、私なりに追求してみようと思う。

「掃命頂礼地藏尊、此れは此の世の事ならず、死出の山路の裾野なる、西の河原の物語、聞くにつけても哀れなり、哀れなるかな幼児が、立廻るにも拜むにも、唯父恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は、此の世の声と事変り、悲しき哀れき骨も身も、砕けて通る許りなり。児は河原にて此の苦勞、一つ積んでは父の為、二つ積んでは母様と、さま幼なる手を合し、礼拝廻向ぞしほらしや、三つ積んでは、古里の兄弟我が身と廻向する。」

しかし、夜になると、地獄の鬼が来て、子供達を責める。せつかく積んだ石の塔を、又こわしてしまふのである。子供達は、悲しみを嘆く。

「峰の嵐の吹くときは、父が呼びしと起き上り、水の流れを聞く時は、母が呼ぶかと走せ下り、辺を見れども母もなし、父を呼べども父も来ず、母を呼べども母とても、知らぬが死出の山路なり、此の苦しみを如何にせん、こけつ転びつ懂れつ、逢いたや見たや恋しやと、もだえ嘆くぞ哀れなり。」

この時、地藏菩薩が現われる。そして、子供を衣の中に入れて、抱きかかえ、「これからは、私がお前のお父母だよ」と、おっしゃるのである。この地藏菩薩こそ、子供達の救いであると共に、現世にとり残された悲嘆に苦しむ、父母の救い主であるのだ。「我が子は逝ってしまったが、後はお地藏様がお守り下さる。」と残り残された両親は、こう思って、悲嘆の中から少し救われる気持ちになるのである。

木喰行道の、現在判明している最も古い彫像は、金剛寺の子安地藏菩薩像である。(安永八年五月二十四日の銘) 私は、あの子供を

胸に抱きかかえ、あやしているような、優しい姿を忘れる事ができようか。非常に、推論が飛ぶのであるけれども、木喰行道も又、子を失った父の一人なのではないだろうか。そして、子供を失った事は、木喰行の一つの原因ではないだろうか。子安地藏を彫り続けた原因ではないだろうか。以下、私の想像を記してみるが、この事は、何故、行道が彫刻を始めたかという理由にもなると思う。

安永七年の夏、木喰行道は、津軽海峡を越えて、松前庄福山に達した。それから、彼は上国、江差、乙部、と西海岸を北上し、道南の霊場として名高い、熊石の門昌庵に達した。こゝは、当時の順礼僧が集まる最北の霊場であった。彼は、ここに来る途中、西海岸の寺々で、多くの木彫りの仏像を見た。それらはほとんどが、五十七センチメートル足らずの、小さなものであったが、円空をはじめとして目定、自在、浄円の彫仏僧のものだったのである。(円空仏との出逢いについては、はっきりした確証が無いが、彼の納経張によれば、次のようになっていた。

「奉納、大乘教典、一部、奥州松前庄熊石邑、大田山本地大日如来、安永七戌壬七月吉日、門昌庵」

これによると、熊石の門昌庵は、その北、大成町の太田権現の納経受付をしていたようである。行道は、実際に、太田権現にもうでた後、門昌庵に納経したのか、それとも、和人の地ではなかった大成町までは行かず、単に、太田権現の受付であった門昌庵を訪ずれて済ませたか、さだかではないが、実際に、太田権現にもうたのであったなら、そこで、彼は、円空仏と劇的な出逢いを持ったはずである。何故なら、「檜山の史跡と伝説」という本によれば、太田権現山の頂上の、洞窟の中には、今燃失しているが、円空仏が

洞窟一面に安置されていたそうである。渡道したばかりの行道が、目をいっばいに見開いて、円空仏を見入っている姿が想像される。円空仏の、木喰行道に対する影響を重要視する余り、論旨が横にそれたようである。

今日でも、私が多わった、金剛寺、観音寺、法蔵寺の寺々には、名も知れない作者の、小さな像が、教多く残っている。この道南海岸には、流木が多く流れ着き、当時の、道南海岸に來た順礼僧は、仏像を彫ることを、一つの修業としたのではないだろうか。

順礼僧達は、海辺へ出て、好ましい流木を拾い、自分の心の中に浮ぶ仏の姿を、思い思いに彫っていた。そして、この事は、北海道産乾棘の需要が高まった、江戸時代中期以降の荒らくれた和人の信仰対象への要求に答えていた。

木喰行道も、これにならって、小さな仏像をいくつか彫った。彼は、彫っていく間に、なんだか、自分に彫像の才能があるように思えてきたのであろう。木喰行道は、前年登山した、下北半島真言の靈場恐山（この山に登った事は、柳宗悦氏もならふれてないが、納経帳には、「奉納経、一部、奥州南部北郡田名部釜師山菩提寺、本尊地藏大士鎮守、正一位嶽大明神、安永七戌六月五日、円通寺別当」とあり、登山した確証がある。）の、西河原と、そこに並ぶ石の地藏のことが思い出され、それと共に、若い日の過失で失った、自分の幼子の事が、彼を苦しめた。これは、煩惱であり、超越する必要があった。それには自分の幼子の來世を守る地藏菩薩像を、自身で作りに出さなくてはならなかった。

彼は、あの有名な空也上人の「西院河原和讃」をとえながら、必死になって大作ととり組んだ。そして、これは、安永八年五月二

十四日に完全に出来上がった。金剛寺の「子安地藏菩薩像」である。しかし、彼自身、完成はしたものの、まだ煩惱から脱し切れずとは言い難かった。

彼は、煩惱から抜け出るまで、地藏菩薩像を、作り続けようと思つた。こうして、その他の地藏菩薩像は、次々と生まれていった。

私の想像は、これで終るが、なお付記すべき事は、この道南海岸の民家には、前記した三体の大作の他に、四十体程の木喰仏が、現存しているといわれる。その中で、地藏菩薩像が、最も多いという。私は、時間とつてが無く、これらを見る事が出来なかったのが、残念でならない。又、熊石町法蔵寺には、木喰行道の、石の供養塔が残っており、その表面には、サンスクリットの他に、「日本廻國中供養願主行道、花押、施主左衛門、天下和順、日月清明、安永八年五月十八日」と刻まれている。この供養塔の表面は、子供に、クレヨンでいたずら書きされていて、保存の悪さを痛感した。

私は、法蔵寺を出て、もと來た道を、海辺に沿って南下していた。そして、遠くに歩く人影を見ると、それは、はるか北辺の地まで來た、木喰行道の姿かと思われ、寒々とした海辺を、ウミネコが群がるようすを見ていると、流木を拾う老いた木喰行道の姿を、思い浮べた。実際、なんという精神の持ち主なのだろうか。この北辺の地まで巡礼してきて、しかも、寒い冬を越して、二年間も留錫し、こつこつと彫像していたとは。

四

柳宗悦氏が、木喰仏を世に紹介して、その記録を集め、大成したことは、余りにも有名であり、正に敬意を表すべきであると思う。

しかし、措しむべき事に、柳宗悦氏程の学者であり、学問の特ち主でありながら、歴史的な事実の把握力が、少しばかり欠除しているように思う。

たとえば、一時期、木喰行道が、日向国分寺に住んでいた事を評して、「国分寺の住職となった。この位置は、彼の生涯で最も高い地位である。」と、言っている。柳氏は、江戸時代においても、奈良時代と同じように、国分寺が、勸修寺として、高い寺位と権力を有すると思っていられるのであろうか。しかし、柳宗悦氏の後、五来重氏が、角川新書の「高野聖」において、当時の遊行僧の実態を、明らかにしていられるし、飯沢匡氏の書かれた、昭和四十年十二月五日号の、朝日ジャーナル「鑑賞席」において、いわゆる「木喰上人」といったイメージからかけ離れた、木喰行道の実態を、論じていらっしやるので、私が、木喰行道に関する、歴史的考察を述べる必要がないように思われる。が、しかし、私は木喰行道の、年齢に関して、従来の、「四国堂心願鏡」を、完全に信じているといった、五来重氏の態度にも、異論があるので、その点に關して、少し述べてみようと思う。

柳宗悦氏が作った、木喰行道の年譜は「四国堂心願鏡」にあるところの「享和二戊歳二月二日ニコレヲカク、天一自在法門、木喰五行菩薩八十五歳。」という言葉から逆算して、作ったものと思われるが、行道は、別に、彼の生年月日を明らかにしているわけではない。つまり、柳宗悦氏は、「四国堂心願鏡」のみを、資料にして、年譜を作成したのである。「四国堂心願鏡」に、嘘があったらものは、役立たずではないか。

柳宗悦氏は、木喰仏の発見者という自負に余りにも酔って、客観

的木喰研究を、おろそかにしたのではないだろうか。

又、別の例をあげてみよう。

この夏、木喰行道の生地、甲州西八代郡の丸畑村において、私は伊藤平蔵氏から、彼の「五輪塔型礼版木」の写しを、いただいた。その表の、五輪塔基礎反花蓮弁に、「六十六才」とあり、五輪塔基礎の部分に、「安永二年二月十八日出、三界無庵無仏木喰靈仏靈社日本順国八宗僧師 天一自在法門慶 考批 五行菩薩」とある。又、版下の裏の部分には、「寛政六寅四月八日二成就 奉納大乘妙經、作 天一自在法門 花押 日本順国 木喰 五行菩薩 年七十七才」とある。

六十六才と七十七才では、大変な違いである。裏書きの方は、墨で書かれたものであるから、後世に、誰かの手によって、書き加えられたものであるとも考えられる。しかし、問題となるのは、蓮弁の「六十六才」と、五輪塔基礎の部分の、「天一自在法門慶 五行菩薩」という言葉である。木喰行道が「木喰行道」の名をすてて「五行菩薩」と、あらためたのは、寛政五年夏、六月、宮崎県の日向国分寺の再建を成し、自己に対して、非常な自信を持った時である。柳宗悦氏によれば、この時、行道は、七十六才であったという。(柳宗悦全集第九巻の年譜による)つまり、木喰行道は、七十六才にして、初めて、「天一自在法門 五行菩薩」と、名乗つたのだという。ところが、五輪塔型納礼版木には、「六十六才」と書かれていて、その上に、ちゃんと「五行菩薩」と彫られている。これは大きな矛盾ではないだろうか。

五来重先生は、「六十六才」とあるからには、佐渡に居た頃の版木に、「天一自在法門五行菩薩」を加えて、寛政六年に、彫り直し

たのであらうと、おつしやっている。が、しかし、どうせ彫るのなら、どうして「六十六才」という部分を「七十七才」と改めなかつたのであらうか。これは、非常に、不思議であり、不自然なことだと思ふ。先生は、柳宗悦氏の主観的な木喰像を、大麥批判していながら、年齢の点においては、まったく、「四国堂心願鏡」を、うのみにしていらつしやるようだ。

寛政六年には、木喰行道は、実際には、六十六才であつたのではないだらうか。彼は、彫刻している時に、日頃年齢をいつわっている自己を忘れて、事実をそのまま彫ってしまったのではないだらうか。私は、そう思えてならない。例証をもう一つ述べてみる。

佐渡にある、両津の町に残る木喰堂に、九品仏と共に、木喰自身の肖像がある。丈は、五十一センチメートル、荷葉の上に端座し、黒と朱の漆塗りであり、示された風貌は、穏かで、円頂にして、有髪、微笑むようである。裏面の素地に、墨で、作年月日及び、自署がある。「天明五年三月十五日作、出生甲斐国、願主 木喰行道五十八才。年譜によると、行道は、天明五年には、六十八才でなくてはならない。ここにおいても、彼の年齢は、十年の狂いを生じてきている。又、もう一つ例証をあげてみよう。

京都府船井郡八木町諸畑の清源寺には、木喰行道に関する、古記録が残されている。これは、現存する、行道の、唯一の客観的資料である。以下、一部を摘出してみる。

「往年文化三年丙寅の冬十月、はからずも木喰行者上人来入せり。先師、礼を董めて相見し、則ち將に嚮応せんとす。曰く、我れ誓願して五穀と塩味を食せざる事に五十年なり且つ臥具を用いず、寒暮一に単衣、時變れども、衣を重ねる事なし、請う高懷を煩わす

こと勿れ、齡い、ここに九十有一歳なり、惟、我れ廻邦して望むもの他に無し、神仏に一千像を彫刻し及び加持を修して、もつて衆生の病苦を救わんと欲するのみなり。」

文化三年には、年譜によれば、木喰行道は、八十九歳でなくてはならない。それなのに、行道は、九十一歳と、いつわっている。年齢の嘘は、比較的小さくなつてはいるが、これは彼が年老いてきたために、そう大きく年齢をいつわる必要が無かつたのであらう。

又、木喰行道は、木喰行を始めて、五十年になると言っているが、しかし、彼はこの時、木喰行を始めてから、実際には、四十四年しかたつていないのだ。彼は、単にこのようにして自己を、行者として高德に見せようとして、努力していたのだ。

何故、彼は、自己の年齢をいつわらねばならなかつただらうか。「四国堂心願鏡」を草したのは、享保二年二月で、行道はもちろん、故郷甲斐国丸畑村にいた。彼は「四国堂」完成と共に、彫刻師として、大いなる尊敬を勝ち得ようとしていた。しかし、彼は、彫刻師として、いくらあがめられても、嬉しくないものである。彼にとって、あくまで、彫刻は仏道修業の余技であつて、勸進を受けるための方便に過ぎなかつた。

彼は、仏道修業者として、高德の人としてあがめられたかつたのである。一般民衆においては、修業僧は、年齢が多ければ多いほど有難く思われるのである。

「お上人さまは、あのようなお歳でも、一生懸命、仏さまを作り、仏道修業をなすつていらつしやる。なんとまあ、高德なお方じやらう。」こう村人から評せられる事を、行道は、期待していたのだらう。

私達は、このような木喰行道の虚栄心に満ちた人間性にぶつかつて、とまどつてはならない。彼の作品を、そのような目で見ては、いけない。木喰行道に、自己を高く見せようとする人間性があつたからこそ、彼は進歩し、彼の作品の芸術性を高めていったのだ。およそ、芸術とは、人間性の一つの変形ではないだろうか。

五

木喰仏を実見したいと思つた私は、日本民芸館に再々訪ずれたが、とうとう、そこにある六体（自刻像、葉師如来像、不動明王像、地藏菩薩像、千手観音像）を、拝見することができなかった。「先生がお決めになつて陳列するので、勝手にお見せできないのですよ。」と、管理人は言う。

木喰行道の、仏像制作当時の精神は、こんなはずではなかった。貧しい民衆の、誰もが拜める、親しめる仏像だったはずである。

大衆の中に潜行していた木喰仏は、大正末期に、柳宗悦氏により発見され、その名声につれて、木喰仏は、ブームに乗りだしてきた。それは、大正末期、昭和初期の文化人によつてもはやされてきた。そして、今や偶像化されつつある。

文化人の一貫したデイレットタンティズム精神は、民衆のものをも取りあげてしまったのだ。それは、単に古典に対するアンチテーゼとしてだろうか。

俗聖である木喰行道の彫仏は、信仰の対象となり、それは、当時の精神のあらわれとなつた。その表現されたものを通じて、私達は生命を、知り得るのである。つまり、木喰仏には、それを作り出した、江戸時代の精神が、如実にあらわされているのである。

木喰行道の生地、丸畑の下を通る橋は、木喰橋、聖橋と名づけられていた。又、木喰行道の遠裔である伊藤家では、本家争い、系図争いをしていふという。新しい文化ブームの波は、大きい。これは、良く解すならば、新しい文化に寄与することになるが、大宗教育家大芸術家として、偶像化されることは、木喰行道の本意ではなからう。子供の遊び相手であり、庶民の親しめるものであり、又、消耗品であつて本望だろう。

もともと高級洋菓子の風味と香気をもたない、木喰仏は、芸術品を作成しようと思つて作られたものではない。体裁は悪いが、あんなのいっぱい入つたまんじゅうとして作られたのである。しかし、それは、型破りの好きな、現代芸術の特選品となつた。

木喰仏は、歴史的意義からいえば、重要民族資料であり、重要文化財ではないのだ。しかし、これは、庶民生活史の資料として、大切であつて、無名の庶民や聖が生んだ芸術として、今日の歴史学が求めるものなのだ。つまり、稀少性を生命とする、重要文化財としてよりも、歴史的に、高い価値があるのだ。従つて、秘宝仏視してはいけないと思つた。

今も私の机の前で、木喰さんは微笑んでいる。何故微笑むのかと尋ねても、彼はただ、笑つてくれるだけ。

(完)

参考文献

木喰の彫刻

土方定一

講談社

微笑仏

五来重

淡光社

仏像

望月信成他

NHKブック

仏像に想う

梅原猛、他

朝日新聞社

- | | | | | |
|-------------------|-----------|-------|----------------|--------------|
| 芸術新潮 (木喰の我) | 辻普堂 | 新潮社 | 美術研究二一七号 | 美術研究所 |
| 芸術新潮 (木喰さんの謙虚な彫刻) | クルト・ブラッシェ | 新潮社 | 日本彫刻史 | 地人書館 |
| 朝日ジャーナル鑑賞席 | 飯沢匡 | 朝日新聞社 | 四国堂心願鏡 | 山梨・丸畑・伊藤平蔵氏蔵 |
| 美術手帳 (行倒れ木喰) | 久野啓二 | 美術出版 | 歌集・納経帳 | 〃 |
| みづゑ (木喰のなかの現代) | 丸山尚一 | 〃 | 如来図軸、護符 | 〃 |
| みづゑ (木喰上人の彫刻) | 木間正義 | 〃 | 南無阿弥陀仏国々御宿帳 | 〃 |
| 高野聖 | 五来重 | 角川新書 | 万人講、十三人講丸札 | 〃 |
| 檜山の史跡と伝説 | 葉梨考幸 | 〃 | 懺悔経諸鏡 | 〃 |
| 柳宗悦選集第九卷 | 柳宗悦 | 春秋社 | 木喰上人の研究(一)と特別号 | 柳宗悦 |
| 郷土の文化財第四卷 | 宝文社 | 〃 | 木喰上人和歌選集 | 木喰五行研究会 |
| 郷土の文化財第十卷 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |